

「八釜しい。着物持ち物に眼はつけんワイ」

「左様なれば懐中に少々の持ち合せも御座ります」

「そんな目腐れ金慾しふは無いワイ」

「そんなら一態何がお入用で御座ります」

「今日限りスツパリと、茶屋遊びが廢めて貰ひ度いのぢや」

「怪つ態な盗人さんで御座りますなア」

「サア其怪つ態な追刺の面を。そうれ。トツクリと御覽なさりませ。」

「トツクリ……………ア、何や。お前番頭や無いか、シヨム無い事すない。吃驚したかな。……………オ

ーイ。皆歸つといで。違ふく。家の番頭やく……………夫れ見いな、お前がこんな事して恐がらすさ
かい、皆逃げて仕舞ふて誰も其邊に居やへんがな」

「アハ、、、、、」

「コレ、笑ひ事や無いで、此方はほんまに壽命縮めたがな」

「若し、考えても御覽じませ。何處の世界に追刺ぢやと云ふて出る追刺が御座りますかいな。時に未
だお氣が附きまへんか、平常は若旦那やのスポ、ンやの、やれ貴方はんや無けりやの、何ふの斯ふ
のと云ふてる奴が、今の狀は何うでゝります。誰れ一人あとへ残て貴方のお身を庇ふた者がゝりま

したか。然も逃げ際の云ひ草を何とお聴きに成りました。傾城の誠と王子の四角、有れば晦日に月
が出る。ア、良え事が申して御座りますなア。彼奴等の心を貴方はんに、お目に掛け様と思ふて、
こんな眞似をして見ました。私は甲斐性の無い生れ附きで、茶屋の茶の字も存じまへんが、今日の
お遊びの費用も端下な事では無からふと存じます。その莫大なお金を掛けてお招びなされた奴等が
いざと云ふ時には、貴方はんを突き退けて、若旦那處の事ちや無い。命あつての物種やと。さア。
あれが彼の人達の正直な心の底でゝります。それじやに依て私が御異見申すのでゝりまつせ。彼の
衆の云ふ事を眞に受けて、深陥り遊ばしたら、それこそ何んな阿呆らしい目を見るやら解りや致し
まへん。なア此道理がお解りになりましたら、ちつとは親御様達の身にもお成り遊ばし、餘り彼ア
云ふ所へはお立ち寄りにならぬ様、誠心を以て御意見を申し上げます。」

「ア、番頭 能ふ云ふて呉れてやつた。私にも漸ふ迷ひの夢が醒めた。今日後お前の云ふ言諾いて、
お茶屋遊びもスツバリ廢めや……………と云ふたら良からふが、まア嫌やちやワイ。オイお前ちと呆
けてやへんか。俺いは何も盗人や追刺の要心に、藝者連れて歩いてやへんで。夫れなら夫れで相
撲取か劍術遣ひでも引張て歩くワイ。いざと云ふ時に客を放つといて逃げて往く。當り前や無いか
い。僅かの線香を買ふて貰やこそ、垢の他人の氣嫌氣棲取て、大事な頭も下げてよるのやで。其上
命まで投げ出さんならん義理が有るかい。オイ能ふ聴けよ。假にお前が得意先から金受取たら。其